

コロナ禍の経験を通して考えるこれからの精神看護学教育

○濱田 由紀, 田代 真利子, 異儀田 はづき

東京女子医科大学

コロナ禍により人との交流や活動の機会が制限され、うつや自殺率、DVの増加等、さまざまなメンタルヘルス問題が生じました。以前より、不登校、ひきこもり、虐待・DV、自殺、うつ、アルコール依存等、これまでの医療や福祉の枠組みだけでは解決できないメンタルヘルスの問題は山積していましたが、コロナ禍によってこれらのメンタルヘルスの問題は一層顕在化しました。コロナ禍による大学生のメンタルヘルスへの影響に関する調査から、学生もキャンパス閉鎖に関連してさまざまな問題を抱えたことが明らかになっています。看護学生は女性が多く、若い女性の自殺率の増加や摂食障害の増加等の女性特有の問題や、実習等で医療現場に行くがゆえに他の学生よりも感染予防のための行動自粛を要求される等、特有の問題があった可能性があります。

新型コロナウイルスの感染拡大下においては、登校制限や病院実習の中止等により、各教育機関において教育内容や方法の変更を余儀なくされました。しかしながら同時に、コロナ禍に関連したメンタルヘルス教育や、ICTの活用など、教育の試行錯誤により、新た

な教育内容や教育方法の開発がすすんだことも予測されます。特に精神看護学では、対人関係理論を用いて学生の対人関係能力に働きかける内容が含まれることから、対面での交流が制限されたなかでさまざまな工夫があったのではないのでしょうか。本ワークショップでは、精神看護学教育に関わる教員・臨床指導者・看護師等さまざまな立場の方とともに、コロナ禍における精神看護学教育の経験およびこれからの精神看護学教育のあり方を自由に語り合う場をつくりたいと思っています。ワークショップでは、全国の精神看護学教員を対象としたアンケート調査の結果の一部もご報告したいと思います。多くの方のご参加を心よりお待ちしております。

本ワークショップは、一部参加される皆さま同士で話し合う形式で行います。こちらの参加についてはご自身の自由意思でお願い致します。（本研究は科学研究費「ポストコロナの『対話の力』」に焦点をあてたICTを活用した精神看護学教育プログラム（基盤C）（一般）、研究代表者：濱田由紀」の一環で行われます。）